

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	崔 鵬偉
論文題目	日本古代中世における百鬼夜行譚の形成と変容
審査要旨	
<p>本論文は、日本古代中世の文献にみえる百鬼夜行に関する記録と物語、すなわち百鬼夜行譚を研究対象としたものである。「百鬼夜行」とは、日本の九世紀後半に現れた暦注に対する説明に初めて見られる語で、具体的な意味は未詳であるものの、のちの説話や物語に見られる異類異形のもと遭遇する話から類推すれば、行疫神などの類と考えられるという。本論文は、百鬼夜行譚に登場する「鬼」のイメージを明らかにし、またそれと遭遇した人間がどのような対応をしたのかを分析することを目的としている。以下に、各章ごとに概要と到達点を記し、最後に本論文の価値についてまとめる。</p>	
<b>序論 問題の所在</b>	
<p>ここで、百鬼夜行譚の研究史を概観し、その問題点を摘出し、さらに本論文の構成を述べている。崔氏は、百鬼夜行の文献記録を概ね三種類に分類する。すなわち、陰陽道において日時の吉凶を示す暦注の日取りを記録したもの、いわゆる百鬼夜行日の記録。次に、物語や説話などに登場する、夜中に貴人や修行者ないし一般庶民が異形異類の集団と遭遇するという伝承。最後に、百鬼夜行絵巻と称される一群の絵巻である。前二者は平安時代から確認できるが、絵巻の出現は室町時代以降になる。これらのうち、絵巻の研究は盛んに行われているが、説話の研究は不十分な面があり、出現の日取りについてのそれは僅かである。そのため、本論では絵巻を考察の対象外とし、百鬼夜行日とその説話についての問題を中心に論じている。</p>	
<b>第一章 「鬼」の定義—『今昔物語集』巻十第十四話をてがかりに—</b>	
<p>本章では、百鬼夜行譚を最も多く収載する『今昔物語集』の「鬼」の概念を検討する。中国では、人が死ぬと「鬼」「魂」「魄」になるとされるが、それがどのような関係にあり、日本でどのように考えられたのか。『今昔』巻十第十四話をてがかりに考察を深め、仏教の影響も考慮に入れながら「魂」「魄」は「たま」という和語に集約されるため、はっきり区別されず、時に「鬼」とみなされることもあったが、「鬼」には食人鬼、護法神・眷属神、疫鬼、冥途・地獄の生き物、餓鬼道・畜生道の生き物、物の精、外道の神など、人の死後になるものという複雑な側面も有していたことを明らかにした。</p>	
<b>第二章 鬼と神と怪異—『今昔物語集』巻二十七第五話をてがかりに—</b>	
<p>前章の検討を踏まえ、同じ怪異に対して「鬼」「神」「妖」のような異なる呼称がみられる現象から、「鬼」の定義を補足する。モノの怪異を「鬼」とする話は、『今昔』本朝世俗部に集中している。そのうち、巻二十七第五話では怪異をいたずらな水の精とするのに対し、同類話の『宇治拾遺物語』では人を喰う妖物としていることに着目し、いくつかの異なる概念が同一の漢字表記に統合される現象の一端を明らかにした。</p>	
<b>第三章 百鬼夜行譚の形成（一）—具注暦とのかかわりを中心に—</b>	
<p>本章では、「附録Ⅲ 古代中世における百鬼夜行資料一覧」を前提に、百鬼夜行譚の形成について考察する。「百鬼夜行」という言葉は日本で作られた漢語である。平安中期の幼学書『口遊』が初見で、「子子午午巳と戌と未と辰と [謂之百鬼夜行]」と百鬼夜行の日を記す。ここでは具注暦（「忌夜行」）・歴史物語（『大鏡』など）・説話（『江談抄』『宇治拾遺』など）・古注釈（『伊勢物語』古注釈）などの例を分析する。次いで、『口遊』『篋篋内伝』『拾芥抄』などの百鬼夜行日の異動を整理し、当時の具注暦の暦注とどう一致するか検証する。時代が下ると、「百鬼夜行、節分之夜也」（『下学集』）のように、出現日が節分の夜に限定されるため、その背景を検討する。さらに、有職故実家の藤原実資にまつわる伝承をてがかりに、節分の百鬼夜行の形成過程を明らかにする。</p>	

**第四章 百鬼夜行譚の形成（二）—行疫神とのかかわりを中心に—**

本章では、夜中の行疫神の侵入を、神仏の験力により無事にやり過ごすという類型の説話群に注目し、文献や絵画における疫鬼の形状描写や行為を比較して、『今昔』とその周辺の疫神のイメージと照合し、どのように認識されていたかを明らかにする。『今昔』巻十六第三十二話の発想の背景に、仏教系文献や中国の志怪小説との類似点があることを指摘した。また鎌倉時代の『融通念仏縁起絵巻』詞書が『八幡愚童訓（乙本）』と同じ構造を持つことから、百鬼夜行譚として認定し、その背景にある本地垂迹説について検討した。

**第五章 百鬼夜行と遭遇した際の対処法（一）—尊勝陀羅尼の利益—**

本章では、平安時代の尊勝陀羅尼の功德によって百鬼夜行の難を逃れる説話群の主人公は、藤原常行・藤原高藤・藤原師輔、すなわち藤原北家の人物であることを確認し、その影響力によって尊勝陀羅尼信仰が広まった可能性を論じている。

**第六章 百鬼夜行と遭遇した際の対処法（二）—警蹕の魔除け機能—**

本章では、室町期に強調される、警蹕（先払いの声）の持つ魔除け機能伝承の源流を探求し、中国と日本における天子の出入などにおける、警蹕の呪術的機能の異同を分析した。その上で、なぜ日本において魔除け機能が警蹕の声と結びついたかを推測した。

**結論**

全体のまとめ。なお論文末尾には、「附録Ⅰ 『今昔物語集』における鬼話」「附録Ⅱ 『宇治拾遺物語』における鬼話」「附録Ⅲ 古代中世における百鬼夜行資料一覧」という 38 頁にわたる資料集を附しているが、研究上きわめて有用である。最後に、「初出一覧」「図版出典」「参考文献」を附す。

本論文において崔氏は、記録や文学作品にみえる百鬼夜行譚の事例を豊富に蒐集し、そこに展開する人々の対応を分析し、その背景にある認識や解釈を検討した。この研究が、従来の研究水準を超えて優れているのは次のような点である。まず従来は百鬼夜行を、室町時代後期に成立した絵巻があまりに強烈な印象を与えるせいで、そこに描かれる器物の化け物である付喪神のイメージで捉えがちであった。しかし本研究では、それらの印象論を排し、平安時代以降の百鬼夜行の文献資料を一点一点着実に分析している。「百鬼夜行」の語は日本にしか見られないが、「鬼」の概念や表現の背景には中国古典があることを闡明し、また日本における鬼神概念の展開を跡付けたことが大きな成果といえよう。さらに百鬼夜行は行疫神などの類と考えられていたが、それを除けるために、尊勝陀羅尼や警蹕を用いている。これまであまり注目されてこなかった、これらの魔除け機能が、どのように説話や絵画作品などに描かれたのか、またそれらが基づいた理論的根拠を、中国・日本の文献を博捜して究明している。その結果、尊勝陀羅尼信仰の流布については藤原北家の関与が窺われること、また警蹕の役割も室町時代にみられる付喪神を百鬼夜行と解釈する説の根源が、やはり藤原北家と関わりが深いことを突き止めたことは、これまでにない見解である。ただし、附録に示された豊富な資料のすべてを論じ尽くしているわけではない。また公開審査会では、「文学」「社会」「庶民」などの語の使用法、絵画資料の取り扱い方法、仏教への理解などに、部分的に疑義が呈され、今後解決すべき課題も明らかになった。

以上を総合して、本論文は博士学位を授与するにふさわしい論文と評価することができる。

公開審査会開催日	2020年 1月 21日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	吉原 浩人	日本宗教思想史	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	大久保 良峻	仏教学(日本・中国)	博士(早稲田大学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	河野 貴美子	和漢比較文学	博士(早稲田大学)
審査委員				